

# 竹林精舎と祇園精舎

令和四年七月法話 薬師寺管主 加藤朝胤

竹林精舎（ちくりんしょうじや ㊦ Venuvana-vihāra）

マカダ国 王舎城（ラージヤグリハ）

頻婆娑羅王（ビンビスアラ Bimbisāra）阿闍世王（アジャセ アジャータシャトル）

佛教史上最初に建立された寺院 迦蘭陀竹林

ジャイナ教の信者であった迦蘭陀（カラランダ）長者がラージギルに所有していた竹園で、佛教に帰依したことによりこれを佛教の僧園として献納し、頻婆娑羅王が伽藍を整備しました。

お釈迦様は、成道（じょうどう）後の二、三、四年目の雨安居（うあんご）をここで過ごしました。

祇園精舎（ぎおんしょうじや ㊧ Jetavana-vihāra）

祇樹給孤独園精舎（ぎじゅぎつごどくおんしょうじや）

コーサラ国 舎衛城（シユラーヴァステイー）

波斯匿王（ハシノク） 毘瑠璃王（ビルリ Vidudabha）

大檀越のスタッタ（アナータピンディカ Sudatta 須達多長者 給孤独長者）長者は隣国であるマカダ国にはお釈迦様が雨安居に過ごすことの出来る精舎があるのに、コーサラ国にも精舎を建立したいと考えていました。

精舎を建立するのに相応しい場所がジェーダ太子の樹林（祇陀林 Jetavana）であることから、その土地の譲渡を望むスタッタ長者に対して、ジェーダ太子が必要な土地の表面を金貨で敷き詰めたら譲ってやろうと言いました。スタッタ長者は土地に黄金を敷き詰めたため、ジェーダ太子は約束通り土地を譲渡し更に自らもマンゴ樹木を寄付して、精舎建設を援助しました。

在世中十九度の雨安居（うあんご）を過ごしました。

## 王舎城の悲劇

マカダ国のビンビサーラ王（頻婆娑羅）とその妻ヴァイデーヒー（韋提希夫人）の物語です。

久しく子宝に恵まれなかった韋提希夫人に可愛い男児が授かります。名前をアジャータシャトル（阿闍世王）といいます。しかしこのアジャータシャトルが出生するとき、その両親は大きな罪を犯してしまいました。

韋提希夫人が阿闍世王を身ごもる以前、王は子供がいないことを占い師に相談すると、山中で修行している仙人が三年後に命を終えて王子に生まれ変わると予言されます。三年が待ちきれない王と王妃は、仙人を殺してしまいます。仙人は死に際に「王は私を殺したのだから、私も王の子となって王を殺す」と言い残します。

さて、王妃が身ごもったことを知ったビンビサーラ王が再び占い師に相談すると、「この子は大きくなると王であるあなたを殺すことになる」と予言されます。迷った王と王妃は、出産の際、高樓の上から地に産み落として死なせることにしました。ところが子供は地に堕ちても小指を損なっただけで命は助かるのでした。

青年となった阿闍世は、お釈迦様の従兄弟でありながら佛教教団を乱したり、お釈迦様の命をねらい教団を奪おうとしたデーヴァダッタ（提婆達多）にそそのかされて、父から王位を取り上げてしまいます。しかしなお安心できない阿闍世王は、ついに父王を七重の牢獄に閉じこめ餓死させようとはかったのです。今も王舎城の遺跡にその牢獄跡が残されています。ところが牢獄に閉じこめられた王は、いつまでたっても餓死する様子はありません。なぜなら、王妃である韋提希夫人が自らの身体に食べ物を塗り込むなどして、牢獄の王に食物を与えていたのです。これを知った阿闍世王は、夫人が牢獄に入ることを禁じてしまいました。自らも宮殿に幽閉された韋提希夫人は、かつては生まれようとする実子阿闍世王を殺そうと計った罪も忘れて、霊鷲山（耆闍崛山）に向かって「悲泣雨涙」しながら、自らの不幸を嘆き、お釈迦様に救いを乞うのです。やがて阿闍世王は自分の罪を悔い、お釈迦様に救いを求めることになります。

このような親子の間に起こった悲劇をモチーフに、罪悪の人間が救われる道を説くお話が『観無量寿経』に説かれています。

## 釈迦国の滅亡

お釈迦様の在世時代、中インドにはマカダ国とコーサラ国の二つの大国がありました。お釈迦様の祖国である釈迦国は、小さな種族でコーサラ国に従属していました。コーサラ国の波斯匿王はしのくおうから王位を継いだ毘瑠璃王びるりおう（ヴィドゥーダバ）は、釈迦国を滅亡させた王として知られています。

お釈迦様がお悟りを開かれて間もない頃、波斯匿王は釈迦族に、貴族の娘を妃に迎えたいと要請しました。しかし誇り高き血筋の釈迦族は「われらは大姓なり。なぜ卑しきものと縁を結ばなくてはならないのか」と、釈迦族は他の民族とは婚姻しないという伝統に従い要請を拒みました。波斯匿王は従属を継続し国の安定を図る為、妃を嫁入りさせる計画でした。そこで釈迦族の摩訶摩男まかなまん（マハーナーマン）大臣は「波斯匿王は暴悪だから、ここで怒りをかえば我が国が滅ぼされてしまうだろう」と思い、大臣自身と下女との間に生まれ容姿端麗な我が娘を選び、娘を沐浴させて身なりを整え、立派な車に載せて波斯匿王のもとに嫁入りさせました。波斯匿王に嫁ぎ妃となった娘はすぐに子宝に恵まれ、毘瑠璃太子を生ましました。毘瑠璃太子が八歳になった頃、母親の実家である釈迦族の地へ行って弓術などの修練に励んで来るよう波斯匿王に命じられ、釈迦族の子弟と共に弓術を学びました。ちょうどその頃、城の中に新たな公会堂が完成し、神々や王族のみが昇る神聖な獅子座に、毘瑠璃が座ってしまいました。それを見た釈迦族の人々が毘瑠璃に「お前は下女が産んだ子だ。それなのに神々や王族さえ昇っていない獅子座を汚した」と罵ののしり、怒り余って毘瑠璃の肘を捕らえて門外に追い出し鞭を打って地面に叩きつけました。毘瑠璃は「何れ王位についた時、この屈辱の行為を許さない」と恨みを懐き復讐すると誓いました。毘瑠璃太子は、怨みを一日も早く晴らすよう側近のバラモンそそのかに唆さされ、父である波斯匿王の留守中を狙い王位を奪ってしまいました。王権が代わった為、波斯匿王と釈迦国との間に築かれていた信頼関係がなくなり、王位に付いた毘瑠璃王の釈迦国滅亡の企てが実施されました。それを知ったお釈迦様は一本の枯れ木の下で座って待ってい

ました。進軍してきた毘瑠璃王はお釈迦様を見付けると、「世尊よ、ほかに青々と茂ったニグロードの木陰があるのに、なぜ枯れ木の下でお座りになっているのですか」と問いかけました。お釈迦様は「王よ、親族の陰は涼しいものである」と静かに答えました。毘瑠璃王は、思いを留まらせ軍隊を舎衛城に戻しました。しかしどうしても怨みは消えません。再び釈迦国を攻めようとしています。このような事が三度繰り返されますが、四度目にお釈迦様は、その宿縁である恨みある業の報いは避けられないと、枯れ木の下にお座りになりませんでした。毘瑠璃王は進軍を止める事はありませんでした。そして釈迦族のいるカピラ城を攻め釈迦国は滅亡してしまいました。

「佛の顔も三度まで」という諺は釈迦国滅亡のこの出来事に由来していると言われている。す。

この時、摩訶摩男大臣は責任を感じ「自分が池に潜っている間に逃げた人は助けてやってくれ」と毘瑠璃王に懇願しました。いつまで経っても大臣が池から出てこないのに、兵に見に行かせるると大臣は池の草に自らの髪の毛を括り付けて死んでいました。

誰が言うともなく王と王の兵達（つわものたち）は7日の内に地獄に落ちるであろうと噂が立ちました。噂に頓着しない毘瑠璃王や兵達は、河原で遊んで宿を取った夜半、暴風驟雨（ぼうふうしゅう）が起き、兵達と共に王の命を奪い去ってしまいました。また宮殿も戦勝の宴の最中、落雷の為に焼き尽くされてしまいました。

お釈迦様は弟子たちに「我々は何の罪もなく、城の人たちに何の犯すところも無いのに人々は知らず知らずに罪を作っている。因果の道理は恐ろしい程確実に報われる」。拘瓊（くそう）（宝石を飾りたてること）の毘瑠璃王は両舌のバラモンに唆（そそのか）され、カピラ城を攻め釈迦国の人々にその恨みを晴らしました。この様に怨みは怨みを重ねて輪廻（わだち）の轍（わだち）を深く掘っているのです。このお話は、『増一阿含経』等に説かれています。

今世界の人々は戦争によって不安と恐怖に怯え、得体の知れないウイルスによって命の恐怖に晒されています。健康に留意し身心安楽を願うと共に、飽くなき欲望が怨みを起し、不安と滅亡を繰り返さないよう勤めなければなりません。